

『医学部の数は十分か』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

強靱であった安倍政権の屋台骨を揺るがしかねない加計学園獣医学部新設問題。そこで、我が母校・北里大学の獣医学部開学以来、半世紀以上も獣医学部が創設されていない事実を知り驚いている。そして国会答弁を聞いていると、獣医師数が足りているのか、余っているのかと議論されているが、実態は如何なものか。

獣医となった同窓生を大勢知っているが、人生に退屈している者は皆無である。ペット病院や牧場やプロイラーを経営（この連中は派手）。研究者として企業や大学、役所や検疫所で専門職に従事（この連中は地味）。なかにはサーフショップ経営で大成功している友人もいる。

それでは、私の本業である医師を養成するべき医学部数が適正なのかを考察してみた。

現在、日本には約30万人の医師が働いているが、納得される医療が、なかなか国全体に行き渡らず、医療崩壊が叫ばれて久しいものがある。それでは医学部を増やして、地域枠入学などを使い、人口減少地域に、一定数の医者を張り付ければ、何とかなるのではという議論もあるが、そうは甘くない。

まずは医者になるには、非常に手間と時間とお金がかかる。1人の若者が6年間の最短コースで医師になるのに、1億円の教育経費がかかると言われる。よって医師養成は、国家的な社会事業とも捉えられ、増えすぎたら医療費が増額されるという理屈で行政は反対。

今回の獣医師増員でも日本獣医師会

の重鎮が反対しているように、日本医師会も私立大学協会も既得権益も加わり、猛反対していた。

そのなかで、最近、半世紀以上ぶりに、東北薬科大学と国際医療福祉大学に医学部が新設された。両校理事長の手腕と執念には脱帽だ。極めて例外的に、海外の医科大学を卒業後、日本の医師国家試験にパスして医師となっている者もいるが、日本の医師は、原則的に日本の医科大学出身である。海外医師免許を有した人間は、優秀で、日本語が堪能であっても、決して診療は出来ないルールになっている。

そこで全国に4年制以上の大学が約800校存在するわけだが、医学部は、いったい何校でしょうか。正解は前述した2校を加えて、82校。入学定員は1学年100人から120人、合計で8500人程が、毎年、医学部に入学していく。ちなみに、小生の家内は音楽大学卒業だが、日本全国にある4年制の音大数は88校と、医学部と、ほぼ同数である。さらに音楽を勉強出来る学校は、短大が29校、専門学校が100校ある。そして当然、それらの卒業生が、皆、音楽家になれば、日本は大変な音楽過剰国家になるわけだが、医科大学の卒業生は、ほぼ全員が医者の仕事をしている。

82校の医科大学のうち、国公立50校、私立31校。もう1校は防衛医科大学校という国防に係る任務を10年間義務付けられた特殊な学校である。学費には大きな差があり、国公立大学は6年間で一律に350万円。私立は平均2500万円程度だが、なかには7000

万円以上の学費がかかる大学もある。そこで特筆したいことは、もともと医科大学は、1970年までは、わずか26校しか存在していなかった事実である。これが、当時の田中角栄総理大臣と、4半世紀に渡り日本医師会会長に君臨し続けた武見太郎氏の強靱な力で、一県一医大設立計画が成功。

1970年から1978年までの僅かな期間に、国立、私立合わせ、一気に50校以上が新設された。

その隙に、医学部に潜り込んだ自分も、本当にラッキーボーイであったと回想するが、その時代に、医学部新設に対する反対意見は無かつたのであろうか。

自身も楽しく医者をしていくし、息子たちも医学部に進学したから、今更、どうでもいい話だが、その頃の真実を知りたい。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。

北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。

東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。

日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。

伊藤病院 www.ito-hospital.jp

大須診療所(名古屋分院) www.osu-shinryoujyo.jp



表参道日記